
ピータバロ 4 Last Tatch ~ 最後の仕上げ ~

風梨凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピータバロ4 Last Tatch 最後の仕上げ

【Nコード】

N3479U

【作者名】

風梨凜

【あらすじ】

イギリスの小都市、ピータバロ。その町にある、名門だが、学校ぐるみで美術品の窃盗団、ピータバロ・シティ・アカデミア。セレブなお嬢様の生徒、ミルドレッドに才能を見込まれた青年画家、キース・L・ヴァンベルトは、学園をまともな場所にするために、その専属画家になるのだが、頼みのミルドレッドは、海外に遊学に出たまま、姿を消してしまっていた。そんな彼の前に突然、彼女が中東の王族と一緒に現れて……。

チャイニーズマフィアや、幽霊の少女や連続殺人犯までが加わっ

て、物語はてんこ盛りのややこしさに……。キースと、相棒の中型犬、パトラッシュの運命は？ ピータバロシリーズ、完結編。

Chapter 1 へ戻ってきたミルドレッド（前書き）

ピータバロシリーズの完結編です。

Chapter 1 戻ってきたミルドレッド

ロンドンから鉄道にのって北に約一時間。イギリスの小都市、ピーターバロ。

この都市の6月の気候は爽やかで、古い佇まいを多く残した街並みには、初夏の訪れを告げるオールドローズやラベンダーの淡い色が美しく映える。

そのピーターバロ市にある”ピーターバロ・シティ・アカデミア”。

内装も外装も超豪華なこの美術学校の中では唯一質素といえるアトリエで、キース・L・ヴァンベルトは、女教師 - レイチェル - の手元を、ちつとも爽やかじゃない顔をして見ていた。

「今、なんて言った？ すり替えた……で、それが本物？ ってことは、ナショナルギャラリーロンドンの国立美術館に、今、展示してあるのは俺の描いた偽物 - 贋作 - ってこと？」

レイチェルは、セクシーな紅い唇を意味深に上げて、ご満悦な笑顔を浮かべた。

そりゃそうだろう、競売にかけたら何十億にもなるフェルメールの真作を手中にしているんだから。

彼女が今、手元に掲げているのは、オランダの巨匠、フェルメールの油絵”ヴァージナルの前に座る婦人”だ。

けど、俺がこの絵の偽物 - 贋作 - を描いたのって、もう3年も前なのに……。

「キース、あなたの腕って大したものよ。関係者も観覧者も、この

3年間、すり替えに気づく者は、誰一人としていなかったんですもの」

知らぬ間に、自分が描いた贋作が真作とすり替えられていたことは驚きだが、この女教師なら、そのくらいは朝飯前にやってしまうだろう。

というのも”ピータバロ・シティ・アカデミア”は、表向きは名門の美術学校でも、裏では学校ぐるみで芸術品の窃盗や詐欺を生業にしている、とんでもない悪徳な場所なのだ。

キースはひょんなことから、17歳の誕生日にこの学園の専属画家となり、望みもしない依頼が幾つも重なって、フェルメールの贋作を描く羽目になってしまったのだが……。

「3日後には、聖堂美術館を貸切にして、シティ・アカデミアが新規に経営する”フェイクビレッジ（贋作村）”のプレゼンテーションをやる予定なの。そこで、ここにある本物のフェルメールと、今ナショナルギャラリーに展示してある贋作をスポンサーたちに見せつけてやるつもりよ。3年間たっても、バレない贋作を作れることが証明されてるんですもの、いやがおうなしにも、贋作村で作った商品に注文が集まるってわけ」

レイチェルの美人でも好きになれない顔が、余計傲慢に見える。キースはちえつと舌を鳴らして、

「”フェイクビレッジ”って、成金画商のグレン男爵から経営権を譲り受けた”中国の贋作村”をそっくり真似て作るっていうあのプロジェクト？ とっくにあんな計画からは手を引いてるって思ってたのに」

「ふふん、秘密裏に計画は進められていたのよ。場所はスコットランドの片田舎。中国の”贋作村”の方は取り壊して、人も技術も、すべてのノウハウをそこに持ってきてるわ。私有地だから、部外者は完全にシャットアウト。そして、これからは、もっとレベルアップ

プして、完璧な贋作作りの村に仕上げるつもりよ」

著作権が切れた絵はいくらコピーしても罪にはならない。中国の贋作村っていうのは、それを利用して、大量生産で名画の複製を作り、商売にしているわけで……。

けど、この学園はそれを本物 - 真作 - として、金にまかせて絵を買い集めている無知な収集家たちに売り込もうっていうんだから性質が悪い。それって、詐欺じゃん。

ふてくされた顔で、小麦色の髪をかき上げる青年画家に、セクシ―女教師は、

「キース、あなたも贋作師として、”フェイクビレッジ”で働かない？ チーフ契約をするなら、今よりもっと契約金はずんでもいいわよ」

とんでもないよ！ 俺の夢は贋作師なんかじゃなくて、聖堂美術館に正々堂々と絵を飾れるような画家になることなんだ。そのために、この悪に染まった学園の経営権をレイチエルから奪いとって、まともな学校にしようとしているのに。

キースはむつつりと口を噤んでしまった。その時、彼の足元にいた相棒――中型犬――のパトラッシュが、”元気をだせよ”と言いたげにくわんと鳴いた。

目をそちらへ向けてみると、茶色と白の毛並みのコントラストと、垂れ下がった耳が相変わらず可愛い。

分かっているよと笑みを浮かべ、相棒の頭をふわりとなぜる。けれども、彼をこの学園に誘った、セレブな小学生、ミルドレッドは欧州へ絵の勉強をすると旅にでたきり、この3年間、まるで連絡が来ないのだ。

釈然としない思いがどうにも晴れない。キースはレイチエルに質

問してみた。

「ミルドレッドは、どうしてる？　こちらに帰ってくる予定ってないの？」

「父親が、世界的に有名な画商ともなると、彼女も色々な場所で引く手あまたなんですよ。そんなことより、プレゼンの準備でとにかく雑用が多いのよ。あなたには、契約金の分は、しっかりと働いてもらいますからね」

キースは、困惑の色に染まった琥珀色の瞳をパトラッシュに向けて、

「ヤバイ……誰の助けも何の策もなしに、この女の言うことに従ってちゃ、学園を奪い取るどころか下っ端の子悪党になり下がっちゃう。でも、

「どうすりゃいいんだ？　俺？」

苦々しげに、そう呟いた。

Chapter 2

次の日も”お天気”は爽やかだった。聖堂美術館通りでは、初夏の訪れを祝うささやかなカーニバルが催され、似顔絵描きや、名のない画家たちが出す露店や、臨時に設けられたオープンカフェが、くつろぐ人々で賑わいを見せていた。そんな中で、

“父と子と聖霊の名において、父なる神へ信仰の告白をせよ！

心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、神である主を愛せよ！”

大音声で聖書の一節を唱えながら、”悪魔祓い承ります”なんて看板を背に、^{エカシスト}胡散臭い神父が通りを過ぎてゆく。

* *

「キース、見てみるよ。また、空気の読めない奴が、おかしな商売をしてやがるぜ」

「あいつ、聖書はあのフレーズしか言えねえんだよ」

古びたカフェのオープンテーブルで珈琲をすすりながら、青年画家は、店のマスターをしている馴染みの男にうんざりとした目を向けた。足元には、彼の相棒がのんびりと転寝している。

馴染みといっても、厚い髭をたつぷりと頬に蓄えている男は、どつぷりと体格も良く、若いのか年寄りなのかちつとも分からない風貌で、店を開く前は何処で何をしていたのか、キースは聞いたこともなかった。けれども、露店で絵を売っていた頃には、彼の良き相談相手だったのだ。

もともと、聖堂美術館通りはこの青年画家の故郷みたいなもんだ

った。けれども、シティ・アカデミアと契約してからは、エクソシストの神父や、おかしな奴らが次々に現れて、ゆつくりとここで過ごす時間なんてなくなってしまっていた。

それでも、ミルドレッドがいる時は、一緒に露店を覗きにきたりして、それなりに息抜きができたのに……

そんな彼に、馴染みの男は、

「まあ、事情を聞いてみれば、お前も大変な学園に巻き込まれたもんだ。……で、あの名門学校にお前を誘ったセレブな小学生のお嬢様とやらは、まだ、海外に行ったままなのか？ それに、成金画商から中国の贋作村の経営権を譲り受けるためとはいえ、フェルメールの”贋作”まで描かされてしまうとは。何で、そんな大切なことをもつと早く俺たちに話してくれなかった？ 色々と助けてやれることもあったのに」

男の顔に視線を向けてから、キースはため息を上塗りする。

いくら、気のおけない仲間だつて、話せない事だつてあるんだ。俺がフェルメールの贋作を描いた本当の理由が、あの絵に魅せられて、キャンバス中に入り込んでしまった成金画商 - グレン男爵 - の息子を外に出すためだったとか……その他にも幽霊の少女に頼まれて肖像画を描いたことがあるだなんて言ったら、頭がどうかしたんじゃないかって思われちまう。けど、

「……実は、フェルメールの贋作の件だけじゃなくて、あの贋作村には、”シティ・アカデミアに経営権を横取りされたチャイニーズマフィアの襲撃”っていう、厄介なおまけがついてるんだ。今は大人しくしてるけど、あいつら、きつと、また襲ってくるに違いない。そんな酷い学園に何時までも生徒たちを置いておくわけにはいかないだろ？ だから、俺とミルドレッドはなるべく早く、あの悪徳女

教師から、シティ・アカデミアを取り上げてしまおうとしてたのに……」

「おい、おい、面白いじゃないか。名門校、ピータバロ・シティ・アカデミアを乗っ取るだって？ 俺も一枚、その話に加えるよ。でも、お前、正直言つて、そんな危ない学園やチャイニーズ・マフィアから、自分の身を守る自信なんてあるのか？」

その時、相棒のパトラッシュが「くわん」と元気な声をあげた。キースは小さく微笑み、

「ミリーは、いつ帰るか分からないし、頼りになるのは、パトラッシュだけだよな。けど、かなり腕の立つ男に以前、用心棒の契約をもちだして、いい線まではいったんだが」

「用心棒？ へえ、それって、いつたい、どこの誰？」

「いや、そいつもこの3年間、まったく姿を見せなくて……」

これだけは絶対に言えるもんか。聖堂美術館にある聖ミカエルの肖像画と引き換えに、用心棒の契約を交わそうとした男が、3年前にこの界限を騒がせた連続切裂き魔だなんて。それでも、あの肖像画の前に立つと、あいつ——イヴァン・クロウ——は、天使みたいに優しく微笑むんだ。本当に殺人犯だなんて思えないくらいに……。

……と、パトラッシュが再び、くわんと声をあげた。

その瞬間に、美術館通りに沿った一般道を、けたたましいエンジン音を巻き上げた黒塗りの大型バイクが走り去っていった。

”KAWASAKI”のゼファー1100。

「えっ、まさか、あれって?!」

イヴァン？！

イヴァン・クロウは、ゼファー1100のスピードにまかせて、手にしたナイフで咽喉を切裂いてくる連続殺人犯だ。けど、日本製のバイクなんて、このイギリスじゃ乗ってる奴は五万というし。ぶるんと首を振るキースの横の道路に、白いパジェロ（super exceed）が止ったのも、その時だった。

また、日本車かよ……で、次は三菱の高級RV車？

その車から降り立ったエキゾチックな黒髪の美人。キースは琥珀色の瞳をきょとんと瞬かせた。

東洋と西洋を混ぜ合わせたような魅惑的な顔だち。背中軽くウエーブした艶やかな髪と、小花をあしらった高級シルクのフレアスカートが、いかにも金持ちっぽい。そして、輝く漆黒の瞳。

キースたちのいるテーブルに近づいてきた彼女は、にこりと微笑みながら、パトラッシュの頭をなぜる。至近距離で見みると、一見した時よりも年齢はずっと若そうだ。

誰だ？　どきんと青年画家の胸が音をたてた。……どこかで見たことのある顔。

「キース、お久しぶりっ。カーニバルだっていうのに、相変わらず、冴えない顔してんのね」

その高飛車な言いつぶりに、

「ミルドレッドお？！　お前ってミルドレッドか？！」

キースは、小学生だったお嬢様のあまりの変身ぶりに、大きく目

を見開いた。

Chapter 3

ミルドレッドが遊学のために旅立ち、キースに一時的な別れを告げたのは、今日と同じ爽やかな風が吹く6月だった。それから3年久々に再会した二人は、お互いの姿に目を瞬かせた。

ミルドレッドにとっては、“鬼門”の青年画家の琥珀色の瞳は、以前と変わらぬ引力を放っていた。カフェの椅子に座った姿が、以前より大人びてキマっているように思えたし、小奇麗になった小麦色の髪も、さらさら感が増したようで、世間的にはほんの少し綺麗になった程度であっても、彼女が胸をときめかせるには十分な進歩だった。

そして、ミルドレッド自身はというと……

「おい、誰？」と馴染みの男がキースの腕をこづく。

「えっと……これが、俺がさっき話してた、セレブな小学生……だった、ミルドレッド」

「ちょ、ちよつと待てよ。ってことは、今、幾つ？」

「ええと、俺が今19で、彼女とは5つ違いだけど、あっちが誕生日が早いから……15歳かな」

「15歳い！？ 目茶目茶、大人っぽいじゃないか。おまけに美人だ！」

慌てふためく馴染みの男に、ミルドレッドはご満悦な笑みを浮かべる。

だって、3年間もかけて、外側も内側も磨きをかけてきたんだから、そのくらいは驚いてくれなきゃ。

そんな彼女にパトラッシュまでが、くわんくわんと嬉しそうな雄

たけびをあげている。満足度が80%くらいに達した時、

「ふふん、背丈も9cmも伸びたのよ。もう、ガキだなんて言わせないんだから」

ミルドレッドは超高飛車な瞳でキースを見やったが、いつまでも視線を外そうとしない彼に少し頬を赤らめ、

「ち、ちよつと、そんなにじろじろ見ないでよ」

すると、青年画家は、はっと気づいて、おずおずと、

「ミリー、お前……」

「なあに？」

そこはかかない満足感と期待感に胸をわくわくさせながら、ミルドレッドは彼の言葉を待った。“綺麗になったね”なんて、言われちゃったらどうしよう。

……が、

「……太った？」

瞬間的に、カフェのオープンテーブルをちゃぶ台返しにしたい気分で、両手をテーブルの端に添える。その時、

「ミルドレッド、急がないと、王宮美術館の館長との約束の時間に間に合わなくなるよ」

パジェロの運転席から、目の前にひるがえった白い布地の眩しさに、キースは再び、目を瞬かせた。

「な、何だ？」

白い足元まであるワンピース？ 頭には白のスカーフを被り、それを黒い二重にした輪で留めてある。洗濯石鹸のCMにでも出てきそうな真っ白な布の間から垣間見える、浅黒く日焼けした肌と切れ長の瞳。

歳は20代半ばくらいだろうか、けれども、この出で立ちは、どう見ても、名作劇場で見た映画「アラビアのロレンス」……も着用していた中東の男性の衣装“ディシュダーシャ”だ。

「おいおい、今日のカーニバルには仮装大会の予定はなかったはずだろ」

馴染みの男が、苦い笑いを浮かべる。

すると、ミルドレッドが、

「この方は、ナシル・ビン・アッサウド・サウド様。中東の王族の血をひく、おんごう拠所なきお生まれの方よ」

キースは、その時、はたと、3年前にこの少女から聞いた冗談みたいな話を思い出した。

そういえば、前に中東の王族にミリーが交際を申し込まれてるって聞いたことがある。こいつって、そいつか?! ちらりと視線を向けると、中東の王族はいやに親しげな微笑みをキースに投げかけてきた。

「ミルドレッド、こちらは君の知り合い?」

なかなかの色男だし、スポーツマンっぽくもあり、好男子ぶりも板についている。

けれども、どこかしら、冷たいモノを感じてしまう。キースは、何となく虫が好かない奴だと思った。ところが、

「彼が、シティ・アカデミアの契約画家のキース・L・ヴァンベルトよ」

まだ、膨れ面をさらしながら、その名を告げたミルドレッドに頷くと、白ずくめの男は優しげな声音で、

「君がね。それにしても、君って随分、綺麗な瞳をしているんだね。まるで、夕日が落ちて、夜の帳が来る前の砂漠の砂みたいだ」

「……」

そう来るとは思わなかった。キースは、かなり引きの体勢になり、「おい、ミリー、こいつって、もしかして男女兼用の快楽趣味?」

「まさか、物腰が柔らかいだけよ。でも、ナシルって、砂漠の王子様みたいでしょ。そしてね、彼って、シティ・アカデミアが計画し

ている贗作村の1番のスポンサーで、おまけに、聖堂美術館で、今
回行われるプロモーションのプロデューサーでもあるのよ」
こそりと耳打ちしてきた少女に、中東の王族までが贗作村にかか
わっているのかと、ただ驚くばかりだった。

*
*

そうこうするうちに、大聖堂から正午を告げる鐘の音が響いてき
た。

「ナシル、こんな小汚いカフェで道草なんか食っていないで、もう、
私たちは行きましょ。聖堂美術館の館長と約束をしてあるのよ。こ
んな場所のB級グルメなんて、比べ物にならないくらい美味しいラ
ンチをね」

キースに向かって、舌を出しながら、パジェロに乗り込もうとす
るミルドレッドの後を、王族が慌てて追いかける。

運転席でエンジンをふかしながら、ナシルは、心残りの表情で古
いカフェの青年を見やった。助手席の少女のご機嫌斜めの理由が分
らず、とりあえず、愛想笑いを浮かべて言う。

「彼が、ミリーが以前に僕に話してくれたすごく腕がいいっていう
画家なんだね。残念だな、もう少し、色々と話がしたかったのに」
「話をしたって、得るものなんか何もないわ。あいつは、ただの無
神経な“貧・乏・画・家”よ！」

*
*

白いパジェロが音を立てて、美術館通りを通り過ぎてゆく。

呆れた様子でその後を見送ると、キースは、

「何だよ、あの傲慢な口のきき方！ あいつ、何年経っても、相変

わらずガキだ」

「まあまあそう言わずに……けど、あんな胡散臭そうな中東の王族とかにかかわって、あのお嬢ちゃん、大丈夫なのかよ。あっちって、恋愛も結婚も10代前半でもまかり通るお国柄だろ」

馴染みの男の意味深な口調に、キースは、思わず珈琲カップから口をはずす。すると、だんだん、ミルドレッドのことが心配になってきた。

「お、俺、ちょっと、様子を見てくる」

がたんと、椅子から立ち上がった青年画家が、相棒の中型犬を伴い、聖堂美術館の方向へ駆けて行く。

馴染みの男は、彼らの姿が人ごみの中へ消えてしまうのを見計らうと、胸のポケットから携帯電話をとりだし、それを素早く操作した。そして、

「もしもし、俺だ。ちょっと耳寄りな話があるんだが」

誰とも知れない電話先の相手に、薄い笑いを浮かべながらそう言った。

Chapter 4

聖堂美術館。

それは、ピータバロ市でも一番歴史が古く、権威ある美術館だ。ルネサンス様式の厳かな造りのファサードを抜けると、目玉の作品が置かれている大展示室があり、そこを中心に、各テーマ毎に細かく展示室が分かれている。

ランチを終えた後に、ミルドレッドは、中東の王族　―　ナシル・ビン・アッサウド・サウード　―　を案内しながら、王宮美術館の館内を巡っていた。

ナシルは、贋作村も含めて、学園の表裏両方の強力なスポンサーだ。欧州各地を遊学する際に何度もあったデートの誘いにも快く応じて、彼に与えてきた好印象を損ねてはならない。ミルドレッドは、小鳥みたいに可愛い声音と、あざとくない態度を心がけながら、白い衣装の裾を翻して颯爽と歩く青年に、にこやかに微笑みかけた。

「ここ、聖堂美術館は、シティ・アカデミアと提携していることもあって、私たち、生徒は、展示室や資料室にフリーパスで入れるのは、もちろんのこと、優秀な作品を定期的に展示してもらえるのも特典の１つなのよ」

「若手画家にとっては、権威ある美術館に作品が展示されるっていうのは、大きなチャンスだからね。おまけに、フリーパスか？　それも、君たちの学園にしてみても、好都合ってわけだ」

意味深な笑みを浮かべて、ナシルは言う。

「……例えば、真作と贋作をすり替える場合などにも」

セレブな１５歳の少女は、しゅいっと口元に指をたてて、悪戯っぽく目で彼を制した。すると、

「大丈夫だよ。何を言っただって、ここには誰もいやしない。今日は、

カーニバルの方に人を取られて、美術館は開店休業みたいなもんじゃないか。……で、こういうことをやっても」

ぐいと腕を引き寄せられ、ミルドレッドは、一瞬、ぎよつと、ナシルに向けて黒い瞳を瞬かせた。彼のほどよく日に焼けた顔が口元に近づいてくる。

ち、ちよつと待つてよ。砂漠の王子様と荘厳な聖堂美術館でキス！？

「あつ、そ、それで、あの絵がねっ」

ミルドレッドは、爆発しそうな胸の鼓動を押さえ込んで、するりとナシルの腕をすり抜けた。

そりゃ、シチューエーションは悪かないけど、私、やつぱり、フアーストキスは、この人じゃやなの。

そんな少女を中東の王族は、不満とも戸惑いとも言えぬ複雑な表情をして見やったが、

「え、えつと、……でも、贋作のすり替えに関しては聖堂美術館は大のお得意様だから、ここの所蔵の絵にはなるべく手をださないように、学園は遠慮してるのよ。……で、その例外がああ絵ってわけ」
そういつて、ミルドレッドは、大展示室を出てすぐの展示室に飾ってある一枚の絵を指差した。

柔らかなタッチの下町のカフェテリアを描いた風景画。

「あの絵が？　ってことは、あそこに展示してある絵は、君たちにすり替えられた贋作ってこと？」

「ううん、違うのよ。私たちが盗った絵も確かにとても価値がある絵だったんだけど、あれはね、その絵を盗んだ代わりに、私がちょ

つと悪戯心を出して、あそこに置いてった別の画家の風景画なの。盗まれた絵と全然違う絵が掛かっていたんですもの、当時は、誰の絵かってすぐく世間は騒いだけど、次第に評判が高まってしまつて、4年たつた今でも、誰の絵かは知られないままに、あそこに展示されているのよ」

ナシルは、展示室の一角に掛けられた、その絵の傍まで歩み寄り、ほおつと小さく感嘆の声をあげた。

「僕だつて、だてに何年も絵の勉強をしてきたわけではないからね、これは間違いなくいい絵だと断言できるよ。単純な色使いとタッチとは裏腹に、カフェに入り込む街灯の光や建物の構図などは、とても巧妙に計算されている。ミリー、さつき悪戯心で絵を入れ替えたつて言つてたね、なら、君は、この絵の作者を知つてるのかい」

少女は多少誇らしげに、こくんと頷いた。

「この絵は、さつき、美術館通りのカフェで会つた青年画家が描いたものなの。レイチエルがシテイ・アカデミアの専属画家にするくらいですもの、彼つてああ見えても、けっこう才能があると私も思うわ」

「あのカフェの青年画家が描いたつて？ でも……」

と、ナシルは納得がいかない表情をした。

「でも、何」

「……彼の描いたフェルメールの贋作をナショナルギャラリーで見だよ。」ヴァージナルの前に座る婦人”の。やっぱり、あれと比べてみると、彼は……名前は何だつたかな？ 贋作師としての方が腕は良さそうだ。この風景画はいい絵だが、粗野というか、品性は全く感じられないからね。ほら、君も言つてたじゃないか、”彼は、ただの売れない貧乏画家”だつて」

「あいつの態度があんまりなもので、つい、ひどいことを言つちやつたけど、キースは贋作師なんかで終わる画家じゃないわ！」

思わず声を荒らげてしまつてから、ミルドレッドは、はつと口を噤んだ。中東の王族は一瞬、鼻白んだ顔をしたが、

「ああ、そういえば、思い出した。彼の名前って、”キース・L・ヴァンベルト”っていったっけ？ ごめん、ごめん。僕が悪かったよ。誰だって、自分が”誇り”にしている学園の人間のことは良く思われないものだ。だから、機嫌を直して他の絵の説明も聞かせてくれよ。例えば……ほら、あそこにある宗教画なんて、どう？」

相変わらずのソフトな笑顔は変わらなかった。けれども、ナシルの言葉に、そこはかとなく皮肉な抑揚を感じて、ミルドレッドは、キースの名前を彼に教えてしまったことに、少し不安を覚えてしまった。

場の雰囲気を変えようと、つとめて明るい声で少女は、絵の説明を続ける。

「これは聖ミカエルの肖像画。作者も年代もわからないけれど、戦火を逃れた教会にたった1枚だけ残った絵で、観客にはとても人気がある作品なの。哀しくて優しくて、見る者を魅了する力がこの絵にはあるわ」

聖ミカエルの肖像画の厳かな微笑みを見ているうちに、ミルドレッドの脳裏には、3年前にぱったりと姿を見せなくなったという、“イヴァン・クロウ”の姿が浮かび上がってきた。あの当時、チャイニーズ・マフィアの襲撃やら、何かにつけて彼女とキースを助けてくれた謎の人物。

彼はこのミカエルの肖像画を後ろにすると、天使みたいに優しく微笑んだのだ。けれども、黒のバイクスーツに身を包み、同色のゼファー1100を飛ばす彼からは、背徳の香りがぶんぶん漂っていた。同じソフトな笑顔でも、白の衣装を翻した煌びやかな王族のナシルとは、まったくの正反対の位置にいるように思えた。

また、押し黙ってしまったミルドレッドに気を使ってか、中東の王族は、

「ねえ、もしかしたら、さっきのことを怒ってるの？　なら、謝るから機嫌を直してくれよ」

「えっ、違うの。そうじゃなくて……」

「なら、何がそんなに君の機嫌を損ねたんだ？　まさか、あのキースとかいう画家のことじゃないだろうね」

その時、ざらりと煌いた切れ長の瞳に、再び、ミルドレッドは口を嚙む。すると、ナシルは、

「君は、あの画家が贋作師で終わる男じゃないって言ってたけど、贋作師っていうのも捨てたもんじゃないと、僕は思っているんだ。何故なら、今の絵画の価値っていうのは、絵、そのものよりも、ブランド力が大切だからだよ。とるに足らない作品でも、それにゴッホのサインが入っているだけで、価値は数百倍にも上がる。どんなに価値ある作品だって、画家に名がなけりゃ、今の美術界はそれには目もくれない。優秀な贋作師っていうのは、そんな不条理な世界を嗤える、僕にとつての魔法使いみたいなもんなんだ。彼らは絵筆という魔法の杖で奇跡を起す。そして、彼らの作った作品は、最初は贋作でも、それが真作として美術館の壁に掛けられている期間が長ければ長いほど、真作としての価値を高めてゆく。ああ、楽しみだなあ。贋作村を客に披露する日が、僕は待ち遠しいよ。馬鹿な収集家を騙すのは、どんなに楽しいだろう。奴らは、本当の芸術が分かっているんだ。それが、僕がシティ・アカデミアからのスポンサーの依頼にこたえた理由でもあるんだからね」

熱を帯びた様子でまくしたてるナシルの表情を見ているうちに、ミルドレッドは、ちょっと感覚がおかしいんじゃないのと、首を傾げたくなってしまった。

「贋作なんて結局は2番手でしかないわ。多くの贋作師は自分が認められないことへの復讐か、阿漕な金儲けのために作品を作りだしているのよ。彼らの絵筆が魔法使いの杖なんて、とんでもないわ。それは、ただの詐欺師のアイテムにすぎないわ！」

一瞬、中東の王族の顔が引きつるのをミルドレッドは、目にしてしまったが、これだけは、引くわけにはゆかないと漆黒の瞳を真っ直ぐに彼に向けた。

「じゃ……何で、お前は、鷹作村なんかに関わってるんだよ……」

爆風が起こり、聖堂美術館の展示室の天井が吹き飛んだのは、その瞬間だった。

「な、何？」

突然の出来事に、頭の中が真っ白になってしまったが、

「ミリーー！！ 逃げるんだ！」

瓦礫とともに、超豪華なシャンデリアが天井から落ちてくる。爆音を聞いて、血相変えて飛び込んできたキースが指差す方向に、少女は咄嗟に視線を向けた。

Chapter 5 ヲイヴァン・クロウ

頭上に降ってくる大量のクリスタルガラス。けれども、すくんだ足は、まるで動かない。

これが、落ちてきたら、私、まるで「オペラ座の怪人」の歌姫？

そんな悠長なことを考えている場合じゃないのだが、彼女の頭の中には、20キロを優に越えた重量のシャンデリアが落ちてくる様子が、いやにゆっくりと映し出されてしまったのだ。その時、

「白い羽……」

ミルドレッドは、ふと目を瞬かせると、天井に向かって意味不明な言葉を吐いた。シャンデリアのガラスの光に混ざって純白の翼の欠片が落ちてくる。

え、もう、天使が迎えに来ちゃったの？

そんな考えが彼女の頭に浮かんた瞬間、床でシャンデリアが砕け散り、耳をつんざく大響音が聖堂美術館に轟いた。

瓦礫とガラスの粉が交じり合った砂埃が、もうもうと天井にまで舞い上がっている。

* *

おおい、ガラスの串刺しミルドレッドなんて、俺は見たくもないのに！

ところが、顔面を蒼白にしたキースの心配をよそに、「オペラ座の怪人」のような惨劇は、この場では起こらなかった。寸でのとこ

ろで彼女の腕を引いた者がいたからだ。

その腕の主は彼女を支えたままで言った。

「まったく、こんな場所で、爆発騒ぎが起こるなんて世も末だ」

「で、でも……と、とりあえずは、無事だったみたい」

ミルドレッドは、足の震えが止まらなかった。冷汗をかきながら、礼を言おうと、

「ありがとう、ナシ……？」

……が、自分を助けてくれたのは、てっきり傍にいた中東の王族――ナシル――だと思いきや、

あれ？ 黒い袖？

一瞬、虚をつかれたように、自分を支えている腕をもう一度、確認してみる。なぜなら、今日のナシルの服装は、一点の汚れもない純白の民族衣装デシュダーシャだったのだから。

正面に目を向けると、キースが、面食らった顔をしてこちらを見ている。

まさか……。

おずおずと、後ろを振り返ってみる。……と、

「イヴァン！ イヴァン・クロウ！」

黒のバイクスーツに身を固めた若い男が立っていた。髪は、深い亜麻色。そして、彼の赤みがかった瞳の色は、この世のものとは思えぬ悲哀を秘めた灰色をしている。

3年前にも、彼は不意に現れては、彼女を何度も助けてくれたのだ。けれども、キースは驚くと同時にひどく戸惑ってしまった。確かに、彼自身もこの男を待っていたのだ。……が、イヴァン・クロウが当時、世間を騒がせた連続殺人犯であることをミルドレッドは、まだ知らない。

「イヴァン、お前、いつの間に、この町に帰って来てたんだ!？」
堪らず声を荒らげたキースに、イヴァンは、
「帰って来たわけじゃないくて、たまたま、この肖像画を見に来てただけだ」

男の背後に掛けられた”聖ミカエルの肖像画”が、愛しむように彼らを見下ろしていた。

「肖像画を……」

「そう、肖像画をね」

ミルドレッドは、丹精な顔に柔らかな笑みを浮かべたイヴァン・クロウに、思わず頬を赤らめたが、

「ミリー、大丈夫かい?!」

慌てて駆け寄ってきた、ナシルと対峙した時、イヴァンは、先ほどとは、うって変わった冷涼な瞳を彼に向けた。研ぎ澄まされた、どこか、この世を憐むような視線に、中東の王族は眉をひそめ、理由も分らず危険を感じて、つい身構えてしまう。

白のナシルと黒のイヴァン。

キースの心臓は、ときどきと鼓動を高めていった。すごく嫌な予感がする。どう考えてみても、この二人を引き合わせるべきじゃなかった。だって、“白と黒”。この色あわせは対極すぎるだろ。

切れ長の瞳を胡散臭げに細めて、ナシルはミルドレッドに尋ねる。
「誰？」

「昔の知り合いよ。色々と危ないところを助けてもらった人なの」

一瞬、白と黒が睨み合う。

「君は、この絵がお気に入りか」

“聖ミカエルの肖像画”を指差したナシルに、イヴァンは無言で頷く。

「ふうん、僕は好きじゃないがね。これって戦火を逃れた教会に、一枚だけ残っていた絵だっていうじゃないか。それって、何か怨念めいたモノを背負っていないか」

聖堂美術館で2度目の爆発が起こったのは、そんな二人のやり取りに、キースが大冷や汗をかいた時だった。

大展示室の柱の1本から火柱があがっている。その後ろから走り去る黒服の姿を目にして、

「やっぱり、うちの学園を恨んでるチャイニーズ・マフィアの仕業か！ イヴァン、あいつを追いかけるんだ！」

「チャイニーズ・マフィア？！ 駄目っ、キース、危なすぎるっ！」

黒服の後ろを追いかけようとした、青年画家の腕をミルドレッドが握り締めて制止する。その横をすり抜け、イヴァンが大展示室の出口に向けて駆けてゆく。けれども、その直後に、背後を通り過ぎていった銃声と、耳元をかすめた銃弾に、

ヤバイ！ まだ、後ろにも、チャイニーズ・マフィアがいたのか。

キースは咄嗟に、ミルドレッドを抱き寄せて、そのまま床に身を伏せた。……が、

「イヴァン……」

大展示室の出口で倒れている黒服と、大理石の床を見る見るうちに紅に染めてゆく血溜まり。その横に平然と立っている長身の男を目にして、苦々しげに、眉をしかめた。

イヴァン・クロウ……ナイフで咽喉元を切裂いてくる連続殺人犯。

けど、俺が決死の覚悟で、3年前に、“聖ミカエルの肖像画”を渡すって約束で出した“用心棒の条件”をもう、お前は忘れてしまったのかよ。

「人を殺すな”って、あの時、俺は言ったのに！」

泣き出しそうな声で訴えてくる青年画家。だが、彼に無表情な灰色の瞳をイヴァンは向ける。

「殺ったのは、俺じゃない」

そして、キースとミルドレッドの後ろに立った男を指差して言った。

「このチャイニーズ・マフィアを撃ったのは、あいつだ」

振向いた青年画家と少女は、

「ナシル……」

まだ、白煙をあげているライフルを構えたままで、うすら笑いを浮かべている中東の王族の姿に、啞然と目を瞬かせた。

Chapter 6

「いくら王族だからって、民族衣装の中にライフルを忍ばせてた上に、それを人にぶっ放しておいて、それでもお咎めなしだって?!」

爆発事件のあった夜。キースは、シティ・アカデミアのアトリエで、女教師レイチエルに向かって、盛大に声を荒らげていた。

「ライフルは狩猟用で許可は取ってあるし、相手はマフィアといっても雑魚だもの、当局だって、町のゴミ掃除ができて有難がつてるんじゃないの。それに、ナシル・ビン・アッサウド・サウードは、掛け値なしの大富豪。当然、事は有耶無耶になるのよ」

「はっ、人を殺しても不問だなんて、それって、深夜にやってる昔のスパイ映画の主役みたいだ」

すると女教師は、これ以上ないくらい小ばかにした笑みで、

「あなたね、そんな物を見てる暇があるなら、贗作村のプレゼンを来週、ロンドン郊外でやり直すんで、その準備に取り掛かってよ」

「ロンドン郊外で?」

「そう、ナショナルギャラリーから車で、小一時間ほどの豪華ホテルよ。そこで、当日の目玉として、あの美術館から私たちが盗み出した、本物の”ヴァージナルの前に座る婦人”を客に披露するわ。

美術館側は、今だに私たちがすり替えた”贗作”を本物と信じて展示を続けていますってコメントを付けてね。それって、我学園が経営する贗作村の最高の宣伝になると思わない?」

ちえっ、その”贗作”って贗作村で作ったんじゃないくて、俺が描いたものじゃなかよ。

思わず鼻白んだキース。……が、レイチエルは、

「今、贗作村で、ゴッホの贗作を作らせているの。100枚よ。あ

なたには、プレゼン当日に間に合うように、その手配とか梱包とかをやってもらうわ。そういえば、ナシルが贗作村に行きたがってたんで、明日にでも一緒にそうしてよ。彼は大切なスポンサーだから、ミリーも同行させるといいわ。……けど、あの娘も相当なやり手ね、今じゃ、彼の一番のお気に入りになり納まっちゃって」

レイチエルの言葉に、そこはかたない嫉妬心を感じ取って、キースは、反吐が出そうだと顔をしかめた。けれども、ミリーもミリーだよ、あんな男と付き合ってるだなんて。

やがて、「頼んだわよ」と強制的な依頼を残して、女教師はアトリエから出ていった。

* *

「ふざけんなよ！ 手配に梱包？ 俺が目指してるのは画家であって、贗作のデリバリー係じゃないんだぞ」

あああ……俺の器はますます小さくなる一方だ。こんなのって、あのナシルに撃ち殺されたチャイニーズ・マフィアの下っ端と変わらないじゃないか！？ 何とかしなくちゃ、何とかっ、でも、どうやって？

くくつと押し殺したような笑いが漏れてきたのは、キースが大混乱に陥っている真っ最中のことだった。そちらに視線を向けると、パトラッシュを従えて、アトリエの奥の部屋から、黒のレザージャケットを羽織った背の高い男が姿を現した。

「イヴァン、僕が呼ぶまでは、奥の部屋からは、絶対に出ないでって言っただのに」

「もう、あの傲慢な女は、出て行っただろ。それにしても、お前の気圧されっぷりは見事だったな」

笑っていても、彼の灰色の瞳から悲哀の色が消えることはなかった。

イヴァン・クロウ……彼は殺人者。それも容赦なくナイフで獲物ターゲットの咽喉を掻つ切る。

俺、何で、こんな危ない奴に用心棒になつてくれなんて頼んじまっただろう？ でもさ……こいつの寂しげな灰色の瞳っていうのが、けっこうクセモノなんだ。ほら、今みたいに、穏やかに微笑まれたりすると、つい、信用してしまいたくなる。それだから、

「えっと、適当なアパートが見つかるまでは、ここのアトリエに泊まっていから。レイチェルは忙しくてしばらくは帰ってこないし、寝泊りに必要な物はだいたい揃ってる」

「ここに？」

「嫌なら俺のアパートでもいいけど……狭いし油絵具臭いし……」

それに、やっぱり、こいつと同じ部屋っていうのは、ちょっとしたあ……。

その時、突然、鳴った胸元の携帯電話の音に、キースはびっくりと身を縮めた。

「もしもし……誰？」

すると、

”駄目よ！！ 絶対に、絶対に、その男を自分の部屋に招いたりしちゃ”

携帯電話の向こうから響いてきた鈴の音のような声に、キースは目を丸くした。そして、アトリエの窓の下に置いてある少女の肖像画にその視線を向けた。

「お前つ、アンナか?! でも、何で携帯に……?」

こんな会話をイヴァンに聞かれてしまうのは不味い。アトリエの隅に移動してから、キースは小声で、

「アンナ、お前、幽霊だろ。携帯に電話をかけてくるって、どういう事だよ」

”私の霊気を声にして、携帯の電波に乗せてみたの。いいでしょ、これだったら、体がなくても、キースと話ができるもん”

おいおい、オカルトと最新技術が変な風に合体してるぞー。

頭を抱えてしまいたくなった青年画家は、傍に駆け寄ってきた相棒ーパトラッシュューに、冗談じゃないよと言わんばかりの視線を向けた。

俺と幽霊のアンナと出会ったのは、4年前のクリスマスだった。

11歳で死んでしまった彼女は、毎年、彼女の誕生日でもあるクリスマスごとに肖像画を描いてくれた画家の父の代わりに、”12番目の肖像画”を描いてくれる画家を探してこの世をさ迷っていた。その肖像画を描いたのが、俺ってわけで……けど、それが描いたら昇天するって言うってはわりには、まだ、この娘はこの世に居座っているんだよな。

「頼むから、おかしい現れ方はしないでくれよ。それだけでなく、俺の廻りには、ややこしい事がいっぱいだっていうのに」

”だって、その男は私が40年前に教会で会った、イヴァン・クロウと同一人物よ。その男はきつと闇の眷属けんぞくなのよ。部屋に招いたりしたら、キースはその男の餌食になっちゃっわよ!”

”餌食”って、言われても、もう契約しちゃったしと、キースは小麦色の髪を掻きむしる。パトラッシュはというと、ただ嬉しそうに、わぁんと鳴き声を上げて尾をしきりに振っている。

「パトラッシュは気に入ってるみたいだし、たとえば、殺人犯であつたとしても……あのチャイニーズ・マフィアに対抗できるのは、俺の廻りにはイヴァンくらいしかないんだよ。40年前の話は、名前が同じ上に姿まで似てたんで、アンナが勘違いしたんじゃないの」

”違う！ 絶対にそいつは危ないんだってば”

イヴァンが、アトリエの隅に座り込んでこそそと携帯電話の会話を続けるキースに胡散臭げな目を向けている。

「ごめん、アンナ、もう切るよ。俺、そろそろアパートに戻るから。イヴァンには俺のアパートじゃなくて、このアトリエに泊まってもらえば、文句はないんだろ」

携帯電話の向こうからは、何の反応もなかった。

鷹作村のプレゼンに、襲ってくるチャイニーズ・マフィア、携帯に電話してくる幽霊のアンナ。それに、ライフル銃を撃ってくる中東の王族もいたっけ……。

キースはますます、ややこしさを増してゆく展開に眉をしかめながらも、

「イヴァン、俺、とりあえず、自分のアパートに帰るから。これからの事はまた、明日にでも」

黒いレザージャケットの男をアトリエに残し、パトラッシュを伴って部屋を出てゆくのだった。

Chapter 7

キースとパトラッシュが出て行ったとたんに、生気が失せてしまったアトリエの空気。月の光までが翳り、部屋には夜風が窓ガラスを叩く音だけが、かたかたと響いている。

「ここが今夜の宿か」

小さなソファと毛布。それだけあれば十分だと、こじんまりとしたアトリエの中を手持ち無沙汰にイヴァン・クロウは見てまわる。別段、興味をひくような物もなかったが、窓辺の下にある少女の肖像画の前に来た時に、ふと足を止めた。その時、

”ちよつと、あんたね、いつたい、どういうつもりでキースと契約なんかしたのよ！”

何処からともなく、きんと耳につく声が響いてきた。けれども、彼は知らぬふりで絵の前を通り過ぎようとする。

“あつ、シカトしようつていうの？ 私の声が聞こえてるくせに。知らばつくれようたって、そうはゆかないんだから！”

その直後に感じた肌をちくりと刺すような視線。イヴァンは、その方向に目を向け、わずかに眉をしかめた。

アトリエの壁に掛けられた大鏡。その中に、白いドレスに赤のケープ。拗ねたように口を膨らませた少女の姿が浮かび上がり、こちらをきつい瞳で睨めつけている。

「お前、あの肖像画の少女か？ 鏡の中に現れるとは、とんだオカルト話だな」

けれども、

“ふん、あなたが私のことをオカルト呼ばわりできる立場？”

だが、鏡の前で肖像画の少女――アンナ――と向かい合った、
イヴァン・クロウは、涼しげな顔で、
「意味がよく分らないが」

“よく言っわよ。この鏡を見れば、あなたの正体なんて丸バレじゃないの！”

その言葉に、黒いレザージャケットの男は、薄く笑って肩をすくめてみせた。

“何で、あんたみたいな人がキースに近づくのよ？”

「聖ミカエルの肖像画が欲しいんだ」

” どうして？ ”

その質問は無視して、イヴァンは人の悪い笑みを浮かべて言う。

「一応、用心棒を任されたわけだから、幽霊の少女が、青年画家をあの世に連れ去らないように、見張らなければならぬし」

” 馬鹿を言わないで。私はそんなことはしないわよ！ ”

「どうだか。それより、俺は正式に彼からこのアトリエに招かれたんでね、ここは俺の縄張り（エリア）なんだ。とつとつ、その鏡から出て元の肖像画へ戻ってくれないか。そんな所に居られると色々目障りなんだよ」

“あつ、ひつどいことを言う！”

そのとたんに、少女の姿は鏡の中から消えてしまった。アトリエの窓辺にある少女の肖像画に目を向けると、かなり不満げなオーラが絵から満ち溢れている。

「キース・Ｌ・ヴァンベルト……本当におかしな輩にばかり好かれる奴」

イヴァン・クロウは、やれやれと小さな息を１つ吐くと、近くにあった白布を手にとり、少女の肖像画にふわりとそれを被せるのだった。

* *

翌日。

おかしな輩にばかり好かれる青年画家、キース・Ｌ・ヴァンベルトは、相棒のパトラッシュと一緒に、白いパジェロの後部座席で、法定規則をかなりオーバーしたスピードに揺られていた。

運転席と助手席には、中東の王族、ナシル・ビン・アッサウド・サウドと、セレブなお嬢様のミルドレッドが、ベタベタとうざったらしい会話を繰り返している。

彼らの目指す先は、スコットランドの郊外にあるシティ・アカデミア、プロデュースのフェイクレレッジ贋作村だ。

曇りが多い、この地方には珍しく爽やかな快晴が続き、絶好のドライブ日和なのは良いとしても、キースは、運転席のナシルに目をやって眉をしかめた。今日の彼は、全身白の民俗衣装とは違って、Ｔシャツとジーンズのラフな服装だったが、運転席にこれ見よがしに置いてあるライフル銃に、物凄い威圧感と傲慢さを感じる。

あの銃で、こいつはチャイニーズ・マフィアを一人、撃ち殺しやがったんだ。

そう思うと、余計にナシルへの不信感がつのっていった。

なのに、ミリーときたら、いくら彼が最強のスポンサーだからって、社交辞令もほどにしないとけよ。

そんな時、

「キース君は、随分、口数が少ないけど、車にでも酔ったのかな」
当の王族が、運転席から爽やかな笑顔を彼に向けてきたのだ。

「いや……別に」

「なら良かった。退屈なら助手席に来る？ 君とも色々と話がしたいからさ」

そう提案するナシルの声音が、野良猫を餌で誘い込むみたいな甘ったるさで、キースは思わず、背中に悪寒が走ってしまった。

男女両用の快楽趣味？ ……けど、そればかりじゃないような。

もつと暗い……陰謀の影みたいなのをこいつからは感じるんだ。

イヴァンと一緒に来てもらえば良かったと、キースは少し後悔した。もつとも、それをナシルが快く承諾するとも思えなかったが。

そうこうするうちに、三人と一匹を乗せたパジェロは、“ピータバロ・シティ・アカデミア私有地”と書かれた看板の横を通り過ぎた。先に見えてきた検問のような場所を指差し、ミルドレッドが人の悪い笑みを浮かべた。

フェイクヒレッジ

「あの先が、学園が経営する贗作村よ。門を抜けても、まだ、少し車を走らせなきゃ行きつけないけどねっ」

Chapter 8 〈贗作村（フェイクビレッジ）〉

パジエロからキース、ミルドレッド、ナシル、パトラッシュが外へ降り立った時、贗作村の入り口に見えてきたのは、窓辺で小花の鉢植えが風に揺れる、西洋風な建物だった。

「フツのイギリス郊外って感じた。これのどこが中国の贗作村なんだ」

キースは何だか拍子が抜けてしまった。微かに油絵具の匂いが流れてくるような気はしたが、想像していたようなアジアンテイストの建物はどこにもなかったからだ。

「くすつ、ここは門番の詰め所だもん。肝心なのはここから先よ」

ミルドレッドの声が、やけに小悪魔っぽい。ナシルが浮かべた薄笑いもすごく思わせぶりだ。

簡単な検問を終えて、入り口を通り抜ける。その瞬間、
「ちょ、ちよつとこれって……」

キースは、目前に広がる光景に、何度も目を瞬かせてしまった。

家と家の間に渡されたロープに、生乾きの油絵が洗濯物みたいにたなびいている。それも一軒じゃなくて軒並みに、何枚も！

これって、“アヴィニヨンの娘たち”と“アイリス”のコピーか？
とんでもないよ！ ピカソとゴッホのコピーがこんなに大量に！？

話には聞いてたけど、ここまで、やっちゃまうとは……。

まるで名作の量産工場……ざっと見積もっても、100枚はあるんじゃないか。口元をぽっかりと開いたままの相棒の顔を、パトラッシュが、大丈夫？ とばかりに覗き込む。すると、まんざらでも

ない様子のナシルが、

「驚くのも無理はないよ。僕は、以前、中国の贗作村にも行ったことがあるけど、シティ・アカデミアはその贗作村のノウハウと、腕のいい職人を根こそぎ、こっちに持ってきてるからね。彼らの技術ってすごいもんだよ。ゴッホの“アイリス”を、分業制にして、こっちの職人は、花びら、あっちの職人は葉の部分って、ものの30分でオリジナルと見紛うばかりに仕上げてしまうんだから」

「たったの30分で？ 本当に？」

「なんなら、後で一緒に工房を見て回ろうか。でも……」

と、いやに馴れ馴れしくキースの肩に手をまわし、彼は言った。

「君ほどの腕を持った贗作師は誰もいないと思うな。だから、ここに来ないか？ 君に”ふさわしい”極上のアトリエが1つ空いてるんだ」

その言葉が青年画家のムカつきのツボを刺激してしまったのだ。

「言つとくけど、俺、贗作師を目指しているわけじゃないし！ それに、元々は露店の貧乏画家だった俺に、その”極上のアトリエ”は、ふさわしいとは思えないんだけど」

「そんなことはないよ。あんな露店に、君がいたっていうこと自体が間違っていたんだ。汚くて、がさつで、低脳で、自分は他より優れてるなんて勘違いしてるクズどもが集るような場所にさ」

ところが、突然、黙り込み、“ふざけんなよ”ってオーラを放ちだした青年画家の異変に気づき、彼の顔を覗き込んだナシルは、鋭く見返してくる琥珀色の瞳に気圧されて、肩にまわした手をついて外してしまうのだった。

「そりゃ、王族のあんたから見れば、この世のほとんどの人間はクズだろうよ！ けど……クズだからって迷わずライフル銃で撃ち殺すような、あんたは、俺から見れば極悪で、非道で、自己中で、気取ってる割には品性の欠片もない、ただの——」

と、キースの弁舌に歯止めが利かなくなってしまう頃、
わおんと、鋭い雄たけびをあげながら、パトラッシュが二人の間

に分け入って来たのだ。尻尾をこれ見よがしに振りながら、足元にじゃれついてくる中型犬に、彼の相棒は、

「ちよつ、止めるよ、パトラッシュ！ 今、”大事な話”をしてたところなのに」

けれども、そこに、ミルドレッドまでが参戦してくる。

「あゝあ、そんな”つまらない話”より、私は”極上のアトリエ”とかを見てみたいわ。”王族”のお墨付きのアトリエって、どんなに素敵なのかしら。ねえ、ナシル、こんな五月蠅い貧乏画家なんて放つとして、これからそこへ行きましようよ」

彼女は出来うる限りの”冷ややかな瞳”と”可愛い瞳”を青年画家と中東の王族に、巧みに使い分けて、まずはナシルの自尊心をキープする。それから、後ろでふくれっ面をさらしている青年画家に、ぷつりと囁いた。

「ちよつと、キレるのもほどにしなさいよ。ほんと、大人げないんだから」

「だって、あいつの王様然とした言いっぷりに我慢なんかできるかよ」

「王様に我慢できないなら、穴でも掘って、”王様の耳はロバの耳”って叫んでれば?！」

パトラッシュの方がまだ賢いわと、冷ややかな視線を残してから、ミルドレッドはナシルの腕をとって、アトリエの方へ行ってしまった。

「穴? 王様の耳はロバの耳?」

後に残されたキースは、一寸、その場でフリーズする。

「くそつ、ふざけやがって。そんなに言うなら穴でも何でも掘ってやる」

半ば、やけくそ気味に足元の土を掘ろうとする青年画家の腕を中型犬が、まあまあとばかりに、くわえて引っ張る。

それにしても、やっぱり、あの王族はムカつくよな。そんなことを言いたげな茶色の瞳を彼に向けながら。

Chapter 9

ふてくされながらも、キースはパトラッシュを伴い、”極上のアトリエ”がある場所へ向かっていた。何だかんだいっても、贋作村の中にあるアトリエっていうのには、興味津々だったし、和気あいあいと先を歩いてゆく、ナシルとミルドレッドを二人つきりにさせるのも癪にさわったからだ。

小さな工房がいくつもある通りを抜けて10分ほど歩いた丘の上に、そのアトリエは建っていた。

こちらの建物も、詰所と同じように、玄関には小奇麗な小花の鉢植えが並べられ、檜の木の扉が備え付けられている。

「ここも欧州風のログハウスって感じた。ちよつと、がっかりだな。さっきの町並みは、それなりに中国の贋作村って感じで気分が盛り上がったのに」

「観光用に作ったわけじゃないし、ここはイギリスなんだから、欧州風で構わないじゃないの」

「でも、多少はさあ」

ミルドレッドに不満げな目を向ける青年画家に、中東の王族は笑みを浮かべ、

「期待をはずして悪かったけど、中を見たら、きつと、キース君も満足すると思うよ。まあ、まずは中をご覧しろさ」

油絵具を溶くテレピン油の匂いがほのかに流れてくる。ナシルに、どうぞと誘われるままに、

「パトラッシュは外で待ってて」

そう言い残し、キースとミルドレッドが中へ入ってみると、

部屋の中央に置かれたイーゼルと画材。それは当然としても、窓の傍にある巨大な炉と、棚にずらりと並べられた化学薬品とピーカ

―は目に異様に映る。

反対の書棚には夥しい数の文献、画集。そして、極め付けは、壁際にずらりと並べられた、見たことがある名作揃いの油絵。

その光景を見ているうちに、キースの脳裏に、彼が以前、フェルメールの贋作を手がけようとした時に読んだ、F・ウインというジャーナリストの記事が思い浮かんできた。

”贋作者に必要な才能は、詐欺師としての才能、美術史家、修復家、化学者、筆跡鑑定家、文書係、嘘をつく才能”

“贋作師を目指しているわけではない”と断言はしたものの、一度はその手法に夢中にさせられた青年画家には、一目で分った。

その部屋は紛れもなく“贋作師”の - 極上のアトリエ - だったのだ。

「すごい……な。俺が“ヴァージナルの前に座る婦人”を描くために、付け焼刃で集めた道具なんて、これに比べたら玩具みたいなものだ」

ナシルは微笑み、

「ここには、中国の贋作村でも、1番の腕利きの贋作師の道具を全部持ち込んであるんだ。ただ、その贋作師っていうのが、82歳って高齢が災いしてか、つい1ヶ月前に亡くなってしまったんだよ。私物を、全部、ここに残したままで」

「82歳？ そんな高齢で現役の贋作師？ やっぱ中国って奥が計り知れないな」

すると、2人の話を傍で聞いていたミルドレッドが、

「あ、言っときますけど、その贋作師って、中国人じゃないわよ。レイチェルに聞いたけど、何十年も前に中国に渡った天涯孤独のイギリス人なんだって」

「天涯孤独のイギリス人？」

またまた、胡散臭い話が持ちあがったと、キースは眉をしかめたが、

「その贋作師って何て名前？」

その質問には、ナシルが答えた。

「アラン・ハンネルって言ってたが、贋作村では“ハン爺さん”で通ってたそうだ」

“ハン爺さん？”

その名を聞いたとたんに、キースは即、フェルメールの贋作を描かせたら天下一品の伝説の贋作師、ハン・ファン・メーヘレンの名を思い出してしまった。彼のファーストネームも“ハン”。絶対にそのイギリス人の贋作師は偽名を使ってる。

すると、ナシルが、

「おそらく、アラン・ハンネルっていうのは偽名だろうな。ただ、どういう経緯で中国に住んでいたかは知らないが、今回の贋作村移転の件で、彼は母国に戻れると、えらく喜んでいたそうなんだ」

そう言って、キースとミルドレッドに切れ長の目を向けた。

「おまけに、この“ハン爺さん”っていうのが、なかなかのクセ者でさ、“俺はユトリ口の隠し子”だって、豪語していたんだ」

「ユトリ口？！でも、彼ってフランス人でしょ。それに、彼自身も、確か私生児だったわよね。その隠し子だなんて、ますます、胡散臭いじゃないの」

疑いの眼を向けてくる二人に小気味良さそうな笑顔を浮かべると、中東の王族は、アトリエの窓辺に置いてある油絵の作品群に歩み寄り、

「“ハン爺さん”の作品をしてみるかい？ユトリ口風なのがいくつかある。けれども、それらはさすがに世間には出せなかったみた

いだけどね」

どれどれと、それらの作品を見て、キースはへえと琥珀色の瞳を輝かした。贋作村一の贋作師というだけあって、どれもこれも良く描けている。すると、ミルドレッドが彼の脇から、ひよいと顔を覗かせ、

「確かにこの「白の時代」を彷彿させるような明暗の色使いは、ユトリ口っぱい……」

……が、その時、

「キース？ どうしたの」

青年画家が“ハン爺さん”の作品の中の1枚を見つめたまま、固まってしまっている。不審に思ったミルドレッドは、彼が手にした絵に目をやって、かすかなム力つきを胸に抱いてしまった。

なぜなら、その絵は、キースがシテイ・アカデミアのアトリエに後生大事にしまっているのと同種の

“赤のドレスと白のケープが可愛いらしい女の子”の肖像画だったのだから

Chapter 10

” アンナ 10歳 ”

手にした肖像画の右下にあつた題名^{タイトル}。それを目の当たりにしたとたんに、キースは心臓の鼓動を止めることができなくなってしまった。

あの幽霊の娘・アンナ - は言つてた……彼女が亡くなる11歳まで、クリスマスの誕生日毎に絵筆をとり、11枚の肖像画を描きあげてくれた“父”は、“有名な画家の息子”なのだと。

アラン・ハンネルは、自称“ユトリ口の隠し子”

1ヶ月前に82歳で死んだ彼は、40年前に死んだアンナの父親だとしても、妥当な年齢だ。

その上、贗作村の経営権をシティ・アカデミアに譲ったグレン男爵は、アンナの肖像画の何枚かを中国の贗作村で見たことがあると言つてた。この肖像画がその1枚ならば……

アンナの父がアラン・ハンネルつてこと？ まさかつて気もするが、自慢にしていた画家の父が、実は贗作師なんてことを知ったら、あの娘はがっかりすぎて、これから、ずっとこの世をさまよい続けるんじゃないのか……

脳裏に一瞬、アンナのはにかんだような可愛い笑顔が浮かぶ。

俺は絶対にそんなのは嫌だ。

考えこんでしまったキースに、ミルドレッドが胡散臭そうな瞳を向けてくる。ふとそれに気づき、

「ミ、ミリーは、ここでナシルと話でもしてて。俺、あっちも見てくるから」

「え、ちよっと、待ってよ」

だが、彼女の横を通り抜けると、キースは、そそくさと部屋の奥の方へ行ってしまった。そんな背中をセレブなお嬢様は、かなり不満げな表情で見送るのだった。

* *

贋作とオリジナルが混ぜこぜになって、ずらりと並べられているアトリエの奥で、キースは、その1枚、1枚を丁寧に調べてみた。すると、

「アンナ9歳」 “アンナ8歳”……」

幽霊のアンナに探してくれと依頼されたものの、どこから手をつけて良いか分らなかった肖像画が、続々と目の前に現われてくるではないか。

やっぱり、アンナ自身に、これを確かめてもらわないと。

キースは、微妙に戸惑った表情でポケットから携帯電話を取り出した。昨夜、アンナが、霊気とやらを電波に変えて電話をかけてきた時の受信履歴。彼の携帯電話にはちゃんと、それが残っていた。

この履歴に電話をかけてみたら、また、アンナが出たりして。

それって、ホラーかSFみたいな話だ。けれども、

……駄目もとで、やってみるか。訳の分からない展開にはもう慣れっこだしと、とりあえず、携帯を操作してみた。すると、

“あれっ、キース？ こんな時間にどうしたの”

携帯電話の向こうから、間髪いれず響いてきた鈴の鳴るような声。

青年画家は、案の定かと苦い笑いを浮かべる。けど、こんな時間って？ 窓から差し込む明るい日の光に目をやり、
「そっか、アンナ、お前って、夜行性だもんな。寝てたらごめん。ちよっと、聞きたいことがあって」

「聞きたいことって？」

不思議そうな声音の幽霊の少女。青年画家は、携帯電話越しに、これまでの経緯をものごくかいつまんで説明し始めた。贗作師の件には触れぬように細心の注意を払いながら。

* *

「ミリー、どうしたの、そんな膨れっ面は君には似合わないよ。このアトリエは、あまりお気に召さなかったのかな」

中東の王族、ナシル・ビン・アッサウド・サウドは、キースに置いてけぼりにされ、まだ、ムカつきの覚めやらぬ表情のミルドレッドに首を傾げた。

「え？ ううん。贗作師の仕事場なんて、そう滅多に見れるもんじやないもの。すぐ興味深く見学させてもらってるわ」

「そう？ 随分、つまらなそうに見えるけど……そろそろ、ここも飽きてきたし、外に出て食事にも行こうか。せっかく、スコットランドまで足を伸ばしたんだから堅苦しいビジネスの話は、もう無しにして」

優しい笑顔と、きめ細やかな心使い。おまけに王族でイケ面。女の子だったら、誰でもコロリと虜にされちゃいそうなナシルの振る舞いを見れば見るほど、何で、あの貧乏画家にはこういった気配りができないんだと、ミルドレッドは、気が重くなる。すると、
「なら、キース君を呼んできておくれよ。彼の方は、このアトリエに夢中のようにけどね」

と、ナシルは小気味良さ気に笑うのだった。

* *

「贋作村のアトリエにある肖像画が本物かどうかなんて、実際に見てみないと、私には分からないわ」

「……でも、この絵をここから持ち出すって訳にもゆかないし」

アトリエの奥で、キースは携帯電話を手に、幽霊のアンナと話を続けていた。すると、アンナが突然、

「ね、もしかしたら、そこにあの娘、いる？」

「あの娘？ ミルドレッドのこと？ いるにはいるけど……」

その言葉を言い終わらないうちに、青年画家は声を荒らげ、

「駄目、駄目っ！ アンナ、お前、またミリーに乗り移ろうっていうんだろ。それだけは止めてくれ」

「だって、前にグレン男爵の息子を絵の外に出す時だって、彼女の体を借りたじゃないの。今回だって、そうすれば、その肖像画が本物かどうかをすぐに確認できるわ。大丈夫よ、私は決して、あの娘の体に乗っ取ったりしないし」

「アンナはアンナのままがいいし、ミリーの体にそう何度も入り込まれても、俺だって困るんだ。だから、ミルドレッドは絶対に駄目！」

携帯電話を握り締めた青年画家が、ただならぬ空気を感じて、後ろを振り返ったのは、その時だった。

「……ミルドレッド」

ナシルに促され、彼を呼びに来たセレブなお嬢さまが、そこに立っていた。

眉をぴくりと動かした、その表情がものすごく怖い。ヤバイ……どこまで、今の会話を聞かれたんだ？ 急いで携帯を切り、彼女に向かつて口を開こうとした時、

「キース、あんたって最低！ 工作中だっていうのに、こんな所まで来て、女の子と携帯でこそそ話してるなんて。それに、どうせ、私は駄目な女よ。そのアンナって子と勝手に仲良くやってれば！」

物凄い勢いで、Uターンしてアトリエの出口へ駆けて行く少女を
キースは、啞然と見やる。

何か、俺、ミルドレッドにとんでもない勘違いをされてしまった
んじゃないのか……。

思わず、ため息が胸の奥から湧き上がってきた。

ややこしい話が、また、ややこしくなる。
けど、それが、俺の運命なんだよな。

仕方ないかと、青年画家は半ば諦めた様子で、携帯電話をポケット
にしまつと小麦色の髪をかきむしりながら、お嬢様の後を追うの
だった。

Chapter 11

「待てよつ、ミルドレッド」

そそくさと歩いて行ってしまうお嬢様に追いついて、肩に手を伸ばせば、するりとすり抜け、先に回れば立ち止まってしまう。声をかけても知らぬ振りばかりで、キースは、仕舞いには面倒臭くなつて、追いかけるのを止めてしまった。仕方なしに、ため息混じりにパトラッシュの頭をなげる。ミルドレッドは、そんな彼にちらりと目を向けたものの

「ナシル、食事に行きましょうよ。あんな貧乏画家なんて放っておいて」

中東の王族は、そんな二人の様子を苦笑しながら見ていたが、

「おやおや、未来の僕の”婚約者”と”共同経営者”が喧嘩なんて、あまり見たくない光景だね」

その瞬間、キースは、えつと声をあげてしまった。

「それ本気？」

いつもは、時めくはずの琥珀色の瞳が、今日は、やけにちくちくと痛い。……が、ミルドレッドはぷいと、そっぽを向いてしまった。「そうなければいいねつて、ミリーとずっと話をしてたんだ」

ご満悦そうなナシルの声音が、ただでさえ良くなかった青年画家の気分を逆なでる。

ミリーがこいつと婚約？ 冗談じゃないよ。危険な香りする奴が好きなら、イヴァンの方がまだまし……いや、あいつは危険な香りなんて生優しいもんじゃないか……それと比べりゃ、ナシルはセレブ度は、天下一品だし物腰は柔らかいし……でも、俺が共同経営者？ どうせ贗作村の贗作者としてなんだろ。ああ……まったく、もう、

ふざけんなって声を大にして言いたい！

「俺、一人で列車で帰る。ここからピータバロ市まで3時間くらいだから」

惘然とした彼の言葉に、今度はミルドレッドが戸惑う番だった。

「えっ、列車で？ 3時間以上かかるわよ。それにここからじゃ、駅までだって行くのに大変なのに」

「ナシルと町で食事するんだろ。そこまで車に乗せていってくれたら、駅はすぐ近くだから」

「ちよつと、何もそんなに拗ねなくても……」

「どうして俺が拗ねるんだよ！ 以前から、スコットランドの知り合いの所へ寄りたいと思ってたんだ。こんな機会でもない限りは、なかなか、行きたくても行けないし」

スコットランドの知り合い？

ミルドレッドは、思わず眉をひそめてしまう。

まさか、それってグレン男爵のこと？ キースが、フェルメールの絵に入り込んでしまった彼の息子を絵の外に出してあげた返礼に、シティ・アカデミアに贗作村の覇権をすべて譲り、スコットランドの田舎へ引越していった画商。そのグレン男爵の館にキースは行こうとしてるんじゃない？

この時の彼女の勘は、100%正しかった。

胡散臭い商売で一財産を成したグレン男爵のことだ。裏も表も知ってる彼なら、チャイニーズ・マフィアやアナの肖像画のこともっと詳しく知っているに違いない。キースはそう考えていたのだ。すると、ナシルが、

「せつかく、ここまで来たのに、喧嘩別れなんて良くないな。せめて、食事だけでも一緒にしていかないか。これからのことも、君とは、もつと話がしたいと思っていたんだ。だから……ね」

そこはかかないオーラを放ちながら、優しげな笑みを浮かべて、顔を覗き込んでくる中東の王族が、何だか怪しい。

止めるよ。俺はあんたの取り巻きの女の子とは違うんだから。

「婚約……いや、共同経営者なんて俺は御免だ」

「おや残念。君って随分、このアトリエにある少女の肖像画を気に入っていたみたいじゃないか。話によっては、譲ってもいいと思っていたのに」

「え、それ、本当？」

「君が専属の贋作師として来てくれたら、1枚と言わず、ここにある、あの少女の肖像画を“全部”、無償で進呈してもいいんだよ」

キースはその言葉にかなり驚いてしまった。無償で肖像画を進呈するということの他に、この男……アンナの肖像画が何枚もあのアトリエにあるのを知ってやがる。

「贋作師の件はお断りだって言ってるだろ！ あの肖像画は……俺が買い取るよ。でも、全部は今は無理だから、まずは1枚から。それからは、ローンでも何でも組んで」

「ローン？ ははっ、君って随分、面白いことを言うんだね。ここにある絵は、そんなに安値では売ろうと思ってないんだけど……で、最初買い取ってくれる、1枚にはどのくらいの値を考えてるの」

どのくらいって言われても……あの絵はいい絵だけど、作者は無名の画家だから……。

「1、500ポンド（約19万円）くらいでどう？」

ナシルはそれに、切れ長の瞳をさらに細めて答えた。

「なら、僕はあの絵にその10倍の値をつけよう。君がそれを払う
とのなら、さらにその10倍だ。それでも、キース君は、あの
絵を全部、買い取れるっていうのかい？ 君は才能のある画家だけ
ど、オリジナルじゃ、それだけの金額を稼ぐのは到底無理だろ。だ
から、贗作村へ来い。ここの贗作師になるのなら、肖像画どころか、
破格の契約金で君を歓迎するよ」

してやつたりの王族の表情に、青年画家は強く眉をしかめる。

畜生、人の足元を見やがって……。だから、金持ちっていうのは
嫌なんだ。

けれども、今、自分がシティ・アカデミアからもらっている契約
金だけでは、ハン爺さんのアトリエにあるアンナの肖像画をすべて、
手に入れることは、絶対に出来そうにもない。キースは迷った。

「ちょっと……考えさせて。今はとりあえず、俺は一人でスコット
ランドの知り合いの所へ行つて来るよ。返事は帰ってきてからする。
それでもいいだろ」

チェックメイトを宣言した棋士みたいに、余裕の表情で頷くナシ
ルと、まだ戸惑った様子のキース。

一方、ミルドレッドは、腑に落ちない思いで、二人のやり取りを
聞いていた。

いくら腕がいいからって、あそこまで贗作師としてのキースにこ
だわる、ナシルって、どうなっちゃてるのよ。それに、あんなにき
っぱりと断っていたくせに、“女の子の肖像画”の話を出されたと
たんに、曖昧な態度を取るキースだって……。

彼が大事にしている“女の子の肖像画”

駄目……。考えるだけでもムカつく。

「ねえ、食事に行くなら、早く行きましょ。もう、私、お腹が空いて死にそう！」

ミルドレッドは、わざとキースの前で大袈裟にナシルの腕をとってみせた。勝手に、グレン男爵の館でも何処にでも行けばいいんだわ。私は私で好きにするから。

けれども、この時のミルドレッドには知る由もなかった。この先、キースと彼女が会えなくなってしまうなんて。

Chapter 12

フエイクレッジ

鷹作村から車で30分ほどの町の駅で、パジエロから降りると、キースは窓越しに運転席のナシルと助手席のミルドレッドに言った。

「ここから列車に乗るんで、パトラッシュのことはよろしく。さすがにこいつを連れて列車には乗れないから。シティ・アカデミアに連れて帰ったら、イヴァンにでも預けて、俺のアトリエで待たせておいて。ああ、それと、お昼には、そいつにも何か食べさせてやってくれよな」

「はいはい。分かったから、さっさと行けば」

つんと冷たいそぶり手で手を振るお嬢様に、困ったような愛想笑いを浮かべると、キースはパトラッシュを傍に引き寄せ、

「お前、ナシルを見張ってるんだぞ。ミリーに何かおかしいな真似をしやがったら、遠慮なんてしないでいいんだから」

すると、彼の相棒は”分った”とばかりに、わおんと鳴いた。

軽く手を振って駅の改札の向こうに消えてゆくキース。冷たくあしらったものの、彼の後姿にはのかな不安を感じて、ミルドレッドは表情を曇らせた。そんな気持ちを知ってか知らでか、
「行こうか」

中東の王族は白々しいくらいに爽やかな笑顔を向けて、パジエロのアクセルを踏みしめるのだった。

* *

町の小洒落たレストランで食事を済ませた後で、ナシルとミルドレッドは、再びパジエロに乗り込んだ。お腹いっぱいのパトラッシュは後部座席で眠っている。

「田舎町の店にしては、いい味だったね」

「スコットランドの郷土料理っていうのも、たまにはいいわね」

にこりと笑みを浮かべたお嬢さまに、中東の王族は同じような笑みを返す。……が、

「キース君も一緒だと良かったのに……ところで、突然、知り合いと会うだなんて、彼つて、どこまで行ったんだい」

「……さあ、知らないわ」と、ミルドレッドは、白を切ってみせた。行く先は、十中八九、グレン男爵の館だと分っていたけれども、キースと男爵の関係を变に勘ぐられても困るのだ。何か別の話題を探さなきゃと、周りを見渡す。すると、後部座席に置かれた箱が目に入ってきた。

「あれつて、もしかして、アトリエから持ってた品物？ 中を見てもいい？」

ナシルが頷くと同時に、箱に手を伸ばしたミルドレッドは、強く眉をしかめた。何故なら、

「これつて、キースがハン爺さんのアトリエで見ていた絵じゃないの！」

それは目下の彼女の天敵——あの“可愛い少女の肖像画”——だったのだから。

「彼が言った売値の10倍だなんて、僕も少し大人げなかったと思つてね、その絵は、キース君にプレゼントするつもりで持ち出してきたんだ。そのモデルつてすごく可愛い女の子だし、画家の彼が気に入るのも無理はないよ」

そう、可愛い。可愛すぎるのだ。何もわざわざ、この絵を持ち出してやることなんてないのにつ。キースがこの絵を気に入ってるのは、絶対に画家としてじゃないんだから。それに、あいつはすでにシティ・アカデミアに、もう1枚、同じ少女の肖像画を持っている

……。そのことも、ミルドレッドは、気が気でなかった。

もう1度、まじまじと肖像画を眺めてみる。ふと、右下にある絵のタイトルに目を移した時、

「アンナ10歳 1969年」……ん？ アンナ？ アンナですって！」

ちょっと、どうなってるの？！ さっき、キースが携帯電話で、こそこそ話してた女の子の名前もアンナだったわ。

……あいつの電話の相手のアンナっていうのは、この絵に描かれた少女なの？ でも、1969年ってことは、これって、40年くらい前に描かれた絵じゃない。まさか、まさか、アンナって、レイチェル以上のお色気の熟女？！

そうだとしたら、せめて、10年後の自分でなければ、ライバル対戦相手としては、勝ち目はない。

うっん、大丈夫よ……キースは、レイチェルになんて目もくれないし、どっちかっていうと、ロリコンっぽいし……。絶対に、私の方が有利に決ってる！

考えれば考えるほど、想像がおかしな方向へ走り出して、ミルドレッドは、頭の中が大混乱になってしまった。

目を白黒させて肖像画に見入っている少女の様子を、腑に落ちない顔で覗っていた運転席の王族は、

「ねえ、ミリー、その肖像画とは別の絵が箱の中にもう1枚あるだろ。いい機会だから、そちらもちょっと見ておくれよ。君の絵を見る審美眼って凄いつて噂を聞いたから」

「もう1枚の絵？」

ミルドレッドはナシルに促されて、箱の中から別の絵を取り出した。

「風景画ね……上手いわ。橋の向こうに見える海の小波や、反射す

る日の光も柔らかく描けていて技術的にはとても優れている。でも……」

「でも？」

「手法もモチーフも色々な画家の模倣のようで、この作品にはオリジナリティがないのよ。これでは、どんな展覧会に出したとしても入賞は難しいわね」

すると、運転席の王族が、突然、高笑いをあげたのだ。

「ナシル？」

と、眉をしかめたミルドレッドに、

「やっぱり、君って噂通りに手厳しいね。そう、その絵の作者に才能なんてない。僕にもそれはよく分ってる。でもね、彼だって、昔は自分は才能を信じていたんだよ。その夢を砕かれた時の惨めな気持ち想像できるかい？　僕は、その絶望を同じような境遇の若い画家に味合わせたくないんだ。だから、キース君を見ると、心配でたまらなくなってしまふさ。あの青年は、画家としてよりも贋作師としての才能を伸ばしてやった方が、絶対に辛い思いをしなくて済む。僕が彼を何が何でも贋作村に呼び寄せたいって思うのは、そういう理由からなんだ」

ミルドレッドは、一瞬、次の言葉が出なくなってしまった。何故って、分ってしまったのだ。

「ナシル、御免なさい。私、何も考えずに、ずけずけと、この絵に好き勝手な批評をしてしまった」

苦くて寂しげな笑みを浮かべた王族に言う。

「この絵を描いた作者って……あなただったのね」

そして、ミルドレッドは、気づいてしまった。

ナシル・ビン・アッサウド・サ우드 - 地位もお金もたっぷり手にした王族 - が、 - ただの貧乏画家 - キース・L・ヴァンベルトに拘る理由に。

可哀想なひと

そんなミルドレッドの小さな呟きが、耳に届いたのか、ナシルは微かに眉をひそめた。するとその時、彼の胸元で携帯電話が鳴った。「ちょっと、ごめん、取引先からみたいだから」

パジェロを路肩の木立ちの下へ止めてから、携帯電話に出るナシル。

「そうか、仕方ないな。後のことはそちらに任すから好きなようにしてくれよ……じゃ、また」

ミルドレッドは、重苦しい話題を変えるチャンスと、飛び切りのつばらな瞳を彼に向ける。

「仕事の話？ 何かいい絵が手に入ったとか」

「ああ、すごく欲しい品があったんだけど、取り扱いが難しくって扱えないんだってさ」

「そうなの？ 残念ね」

「まったくね。でもね、1番、欲しかった物はどうやら手に入りそうだよ」

こちらも飛び切りの笑顔を向けてきたナシルに、ミルドレッドは目を瞬かす。何か様子がおかしい。彼の切れ長の瞳がやけに艶やっぼい。

すると、ナシルが、助手席のシートを倒して彼女の肩に腕を伸ばしてきたのだ。ミルドレッドの心臓は跳ね上がった。

「ち、ちょっと、待って!!」

「駄目」

絶体絶命の状態に、お嬢様は焦りまくった。

これは、逃げられないかもー。

キースの馬鹿！ 一人でなんか帰るもんだからっ。

乙女の危機だっというのに、何であんたはここにいないのよっ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3479u/>

ピータバロ4 Last Tatch ~ 最後の仕上げ ~

2011年10月11日03時06分発行